

仏教説話

キサーゴータミー

むかしむかし、インドに、キサー(やせたという意味)ーゴータミーという母親がいました。
いろいろ苦勞して家庭をもつて、やつとこどもが生まれたのですが、ようやくよちよち歩きができるようになったばかりの一人息子が病気で死んでしまいました。半狂乱のようになった、キサーゴータミーは、死んだ子供を抱えて、息子を生き返らせ、治す薬を求めて、町の中を探しまわりますが、どこにも生き返させる薬はありません。そんな時、ある人が近くの町にお釈迦様という尊い方がきていて、その方ならあるいは知っているかもしれないと教えてあげます。ゴータミーはすぐさま釈尊のもとを尋ねます。
釈尊は「わかった、直してあげよう、直すには材料としてケシの実がある。ケシの実をもらって来なさい。」

ただし一人も死人が出たことのない家から白いケシの実をもらってくるように」と言います。
キサーゴータミーは子の亡骸を抱きかかえると、再び町に戻っていききました。最初の家の前に立って、彼女はさつそく尋ねます。「お宅に白いケシの実はありますか？ 息子の薬になるそうです」
「ありますよ。ちよつとお待ちなさい」
ケシの実を持って出てきた家の人に、キサーゴータミーは尋ねました。
「お宅では息子さんも娘さんも、どなたも亡くなった方はおられませんか？」
「何をおっしゃいます。うちでは今生きている人よりも、死んだ人間のほうがずつと多いですよ」
「それなら、これはいりません。この子の薬にはなりませんから」そのあと、彼女は家から家へと尋ね歩きました。しかし、どこでもケシの実を手に入れるこ

とはできませんでした。死人を出したことの無い家は一件もなかったのです。家々を尋ねたキサーゴータミーは、「ああ、なんと恐ろしいこと。私は今まで、自分の子供だけが死んだのだと思っていたのだわ。でもどうでしょう。死者町中を歩いてみると、死者のほうが生きている人よりずつと多い。」と死は、どこの家にもあることに気づかされました。
そこで釈尊が彼女に、子供や家畜 財産に 氣を奪われてとられる 人を死王は さらいゆく 眠りに沈む 村々を 大洪水が のむように と詩をうたいました。
死が、生きる者の逃れられない定めであることを教えられたキサーゴータミーは、出家して生死輪廻の苦しみの世界を超えた、仏の悟りの世界を求めていききました。こうして尼僧となった彼女に、釈尊は 不死の境地を 見るこ

【解説】
キサーゴータミーの苦しみ、悲しみが、解決されていく過程を通して、私たちもまた、死という避けられない根本問題と向き合うべきことを教えています。
・息子の死を通して、キサーゴータミーは自分自身の人生の問題に目覚めていきました。この話は、仏さまの教えは、私たちが自分自身の問題として教えを聞いていかねばならないことを教えるとともに、愛する人の死がそのための得難い機縁となることを教えています。人生のありよう、無常の理に目覚め、生死を超える道を求めるところに、私たちの苦しみや悲しみの根本的な解決があることを教えています。

人は必要とされて 生かされているのだ。 沢庵
ホ ム ペ ー ジ 改 葬 さ ん わ
日出店：速見郡日出町川崎会下(空港道路入口) TEL (0977) 72-6415
三重店：豊後大野市三重町赤嶺1041(トライアル横) TEL (0974) 22-3301
森町店：大分市横尾2733-1(大東中学入口) TEL (097) 524-6525

さんわ便り

第174号 所部町 行グループ 報 廣 森 刊 さんわ 集 編 大分

そして、私は僧侶になった。

私は、真宗大谷派の僧侶である。真宗大谷派とは京都駅前東本願寺を本山とする教団で、通称「お東」とも呼ばれる。

現在、私は父が住職を務める小さな寺で僧侶として働いている。私は寺の長男に生まれ、幼いころから寺の後継ぎとして期待されてきた。しかし、私は寺を継ぐのが嫌であった。理由は、世間の僧侶に対するイメージに耐えられなかったからである。

「坊主丸儲けだね。税金無いんでしょ？頭は丸めなの？肉は食べていいの？生臭坊主だな。」

幼いころから今まで、どれだけ周りの人に言われてきただろう。その度に、

「そうじゃないんだ」と説明しても誰も理解してくれなかった。私は、そう言われ続けながら生きていくことに、心底うんざりしていたのである。

周りの人間が、決して悪気があつて言っているわけではない、というのには分かっていて。思っていることを素直に言っただけなのだろう。世の人々に問題があるのではない。そういうイメージを世間に与えてしまった仏教界に問題があるのだろう。世間に蔓延してしまつたイメージを覆すことは相当に困難なことである。

いつしか、私はお寺には未来が無いと考えるようになっていた。

私は、中学、高校と、自分の生まれ育った境遇を馬鹿にされたくない虚勢を張った。両親は、何度も学校や警察に謝罪に来た。

私の素行の悪さは、お寺の御門徒(檀家)さん達の耳にも入った。

「お寺の息子なのにねえ...」
そして、余計に私は自分の立場を悪くしていった。
「こんな自分にお寺を継ぐ資格は無い。自分のことを知っている人が誰も居ない町で、寺とは縁を切つて人並みの人生を歩みたい。」
私は日々そんなことを考えていた。

私は大学を卒業すると、父に「お寺を継ぐつもりは無い。」と言ひ残し、寺を離れ街でパートを借りて会社勤めを始めた。会社勤めは大変だったが、精神的には楽だった。もう、色々と言われることもない。仕事は順調で、部署も任せていただきやりがいがあった。

そして、私は妻と出逢い結婚して子供を授かり、気が付けば40歳も近い歳になつていった。

なつていった。

そんなある日の夜、父が倒れて救急搬送されたと母から電話があつた。高速道路を飛ばして駆け付けると、病院のベッドに横たわる父が居た。父の疲れた顔や白髪は、実際の年齢よりもずっと老けて見えた。大事には至らず原因も不明だったのだ。恐らく過勞だったのだろう。父は、田舎の小さい寺では家族を養えなかったために、僧侶とサラリーマンを兼業して昼も夜も休日も無く働き続けてきた。

私が大学を卒業すると同時に父はサラリーマンを辞めた。つまり、父は私の学費のために体を酷使してきたのである。しかし、その息子は「寺を継がない」と言つて出ていったために、世間ではとつとくに現役を引退している歳でも休日もほとんど無く一人で僧侶の仕事をこなしていた。

この時、私は思った。「今まで散々迷惑をかけてきたのに、まだ何一つ親孝行らしいことをしていない。」

今、恩返ししなければ一生後悔することになるかもしれない。」
私にできる一番の恩返し。それは父の意志を継いでいくことだった。

つまり寺を継ぐということだ。しかし、お寺の収入は月々僅かに15万円程度。会社勤めから比べると半減だ。ボーナスも無い。年収200万円にも満たないのでは、とても家族を養っていけない。だが、妻は「多少今までの貯金もあるし、子供達を保育園に預けられるようになったら私も働きに出るから」と背中を押してくれた。

そして一年後、私は会社を辞めて僧侶になった。

ひそかにおもひみれば 真宗僧侶の求道と 伝道の日々 より

